

平成 30 年度 大台ヶ原自然再生推進委員会
森林生態系・ニホンジカ管理ワーキンググループ（第 2 回）
議事概要

1. 開催日時

平成 31 年 2 月 18 日（月）13:30～16:45

2. 開催場所

OMM ビル 8 階 環境省近畿地方環境事務所 大会議室

3. 出席者

【委員】

氏 名	所 属	役 職	備考
木佐貫 博光	三重大学大学院生物資源学研究科	教授	欠席
佐久間 大輔	大阪市立自然史博物館	学芸課長代理	
高田 研一	高田森林緑地研究所	所長	
高柳 敦	京都大学大学院農学研究科	講師	欠席
鳥居 春己	奈良教育大学自然環境教育センター	特任教授	欠席
日野 輝明	名城大学農学部	教授	欠席
松井 淳	奈良教育大学教育学部	教授	
村上 興正	元京都大学理学研究科	講師	
八代田 千鶴	国立研究開発法人森林総合研究所関西支所	主任研究員	
横田 岳人	龍谷大学理工学部	准教授	

※五十音順

【オブザーバー】

所 属	役 職	氏 名	備 考
近畿中国森林管理局 計画保全部 保全課	企画官（自然再生）	積 正治	
近畿中国森林管理局 計画保全部 保全課	野生鳥獣管理 指導官	淵上 弘文	欠席
近畿中国森林管理局 三重森林管理局	地域林政調整官	落窪 弘行	
奈良県 農林部農業推進振興課	主任主事	中谷 元彦	
上北山村 地域振興課	主事補	更谷 亮太	
奈良県猟友会 上北山支部	支部長	福西 貢	欠席
一般財団法人 自然環境研究センター	主席研究員	千葉かおり	
	研究員	日名 耕司	
	研究員	中田 靖彦	
株式会社 環境総合テクノス	マネジャー	樋口 高志	
	リーダー	樋口 香代	

【事務局】

所 属	氏 名
近畿地方環境事務所 国立公園課長	榎本 和久
野生生物課長	澤志 泰正
自然再生企画官	竹下 守昭
野生生物課 野生鳥獣感染対策専門官	戸田 博史
吉野自然保護官事務所 自然保護官	関 貴史
吉野自然保護官事務所 自然保護官補佐	小川 遥
株式会社 応用生物 主任研究員	草加 速太
特任研究員	西川 和夫
研究員	稲田 敏昭

4. 議事内容

- (1) 平成 30 年度ニホンジカ個体数調整及び生息状況について
- (2) ニホンジカの効果的な捕獲計画の検討について
- (3) ニホンジカと植生の相互関係モニタリングについて
- (4) モニタリング整理、計画について

5. 議事概要

(1) 平成 30 年度大台ヶ原ニホンジカ個体数調整及び生息状況について

・シカ搬出用テラー使用に伴うササ類(ミヤコザサ)への影響調査について、植生回復の条件としては、植物のみに着目するのではなく、土壌侵食等を考慮する必要がある。侵食は勾配と土壌の粒径組成が重要。侵食は表面流下水の流速と流量で決まる。流速は勾配(傾斜)で決まるため、せめて勾配の情報が必要だ。(委員)
→この調査は現地 WG の際の意見に基づくもので、シカの搬出にテラーを使うため、ササ地では詳細な調査ではなく、写真等で植生回復の概略が把握されれば良いという調査であった。1 年ほどたてば景観的には回復していることがわかった。また、今後搬出困難地においても捕獲する場合、テラーの使用は必須となるため、必要に応じて、調査するかどうかを検討したい。また、報告書レベルではおおまかな勾配の情報を入りたい。(事務局)

・問題は運搬道が見えることであり、ミヤコザサを回復させたいという話ではない。景観的に道として見えると、利用者が登山道として勘違いすることが問題だとして議論が始まったはず。6 月に捕獲するのであれば、利用者に搬出ルートについて、きちんと説明されていれば問題ない。(委員)

・栄養状態が妊娠率に影響するのであれば、妊娠開始時期も遅れてくる。年齢ごとに分けてあげればこの点も明らかになるはず。(委員)

→今後、歯による齢査定も進めるので、それを踏まえて考えて行きたい。(事務局)

・ここまで東大台と西大台で差があると、捕獲目標も東大台と西大台は分けて考える必要がある。「ササ有り」地域と「ササ無し」地域で考えるのが良いと思う。(委員)

→これまでの傾向では、ササ無し地点は下層植生が貧弱なので生息密度も上がっていない。現在の特定鳥獣管理計画も向こう 3 年間あるので目標生息密度についても将来的には東大台と西大台もしくは「ササ有り地域」と「ササ無し地域」に分けて議論していく必要があると考えている。(事務局)

(2) ニホンジカの効果的な捕獲計画の検討について

・成果からすると首輪式わなに移行せざるを得ない。首輪式わなの技術的問題の克服が捕獲率の向上に不可欠だ。(委員)

・資料において「防鹿柵(鉄製)の周りで捕獲する」とあるが、柵回りは調査者がよく歩くため、わなの設置場所の注意が必要。(委員)

・それに関して、シカは柵の回りを歩くが、主要のシカ道にわなをかけてしまうとすぐに馴れる。また、捕獲したシカが暴れると柵が傷む。わなは柵直近ではなく、柵に至るけもの道にかけるのが良い。(委員)

・資料の「大型囲いわな(防鹿柵内に誘引)」について、「防鹿柵の目的外利用はできないとなった」とあるが、検討してもらいたい。(委員)

→防鹿柵は公共工事の予算で実施し、目的はシカを入れないこととしているため、行政的には目的を変えての利用はハードルが高い。ただし、検討は継続させるということで、改善の余地は残している。(事務局)

・クマの錯誤捕獲時は人の通行を制限するのか。(委員)

→当初はクマの不動物の時も通行止めにしていましたが、不動物時は檻の中において問題ないため、巡視員を置いて注意喚起するに変わった。(事務局)

・くくりわなに掛かったシカにクマが付いていた場合はどうするか？(委員)

→人身被害が発生しそうな場合は、専門家が入って対処する。西大台は登録制なので入山者数は把握できる。東大台は通行止めにし、速やかに撤去するように考えている。(事務局)

(3) ニホンジカと植生の相互関係モニタリングについて

・新規にこの調査をするという事か？(委員)

→過年度の WG において、シカの被害状況については周辺を含めて把握する必要があるという意見があり、昨年度から検討してきた。昨年度は「藤木の衰退度」について検討し、当該方法を大台ヶ原に適用するには、面積的に小さい等(衰退度は 5 kmメッシュを基本とする)、難しいとなった。また、本年度の第 1 回の WG では「食痕履歴法」について検討したが、シカの生息密度が上昇傾向にある今の段階では、当該方法の適用は難しいとなった。そこで、ここではこれまで実施してきたカメラトラップと合わせた下層植生調査(コウヤ谷 4 地点、牛石ヶ原 1 地点)を、カメラトラップ調査地点全体に広げて、シカの生息情報とそれに対応した植生との関係を見てみようとしたものである。新しい調査というのではなく、今ある調査の拡大である。(事務局)

・カメラの画像を例えば 6 月~7 月に限定して画像を集積し、植生調査の固定区は、シカがいなくなり、植生が回復した段階からセットしてもいい。当初から設置する必要はない。(複数委員)

→本案件については 2 年間検討したが、今後はシカが減少してから、下層植生の調査として検討していく。それまでは画像データを整理していくという方向で考える。(事務局)

(4) モニタリング整理、計画について

・資料では「糞粒法による生息密度指標を 5 頭/km²まで減少させる方法を検討」とあるが、一方で「糞粒法からカメラトラップ法(REM 法)に変更する」という説明があった。この糞粒法からカメラトラップ法への変更については検討したほうがいいと思う。(委員)

→REM 法については、これまでメス 1 頭の情報から移動速度を算出していたが、来年度からは 3 頭に GPS(発信器)をとりつけ、年間を通じた移動速度、行動圏の情報を得ようと計画している。それによる移動速度を踏まえ、REM 法と糞粒法との関係が相関していれば、移行しようと考えている。移行期間として、今後 3 年間は糞粒法を実施し、その間で相関がうまく取れなければ、2 年間の猶予期間を加えて、検討しようと考えている。(事務局)

・糞粒法は秋口に調査を行うため秋のデータとなる。大台ヶ原は季節によりかなり密度が変わる。カメラトラップ法は年間を通じたデータを得られるが、どこに焦点を当てるのが問題。もしも 5 頭/km²を変更するのであれば環境省の基準も変えなければならない。(委員)

→その通りである。ちなみに、奈良県特定鳥獣管理計画の中に大台ヶ原も含まれており、山間部では 5 頭/km²を目標としている。5 頭/km²は 10 月の糞粒調査に基づくもので、糞粒法は全くやめてしまうのではなく、5 年毎に実施することにしていて、その値も使える。(事務局)

以上